

《 第37回 高高神田会のご案内 》

今年も月島・もんじゃで 江戸風情を感じつつ

新入会員の入会式を実施しつつ、連歌を半歌仙巻きつつ

東慶寺コンサート(11月6日開催予定)の打合せをもする会

皆様

ようやく秋を迎えましたが、寒暖変動や秋雨が続く中、皆様恙なくお過ごしのことと存じます。

さて、神田会は、秋の東慶寺コンサートを11月6日(土)に控えて、演奏者は、今年は蠟燭照明の演出の下での演奏計画をたてて、白粉(おしろい)をどう塗るか研究をしつつ演奏準備に励み、観衆予定者の方は、フルートと源氏物語、ベースと平家物語の源平合戦は高松高校に相応しいと大いに期待しているところであります。

この東慶寺コンサートに先立ち、例年とおり演奏者も観衆予定者も一同に会して、打合せをしようかとの話が起り、昨年に引き続き月島に集まり、「もんじゃ」などを食しつつ、最近めでたく(?)神田会に入会をされた新入会員の入会式を実施しつつ、且つ余裕の時間には呑みながら「連歌」もやりつつ、東慶寺の打合せをする会合を、下記のとおり開催することになりましたので、日時が迫っております故、慌てながら、皆様方にご来駕のご案内を申し上げる次第であります。

記

開催日時 : 10月4日(月)

午後6時30分頃

場 所 : もんじゃ・割烹「能登」(下図参照) 地下鉄「月島」駅より歩いて5分

東京都中央区月島3丁目13-12

03-3533-3059

会費 : 会費は後で神田会方式(若いひとや女性は安く)で精算します。

まあ「もんじゃ」やから、若くない男性もそんなに高くはならないはず。



当日の東慶寺のコンサート打合せは、いつものように、有能な諸兄姉の会議なので飲みながら何やら分からんうちに、打合せができるのかとも思っておりますが、今年の灯りを舞台に使うとの趣向に伴う打合せが検討課題（蝋燭購入係、照明係、防災隊結成など）としてあがっております。

神田会の新入会員入会を歓迎する式典は、初めての企画です。

実は、現在、神田会には会員名簿もなく（そもそも、神田会には会員などという概念がない組織です）、実にいい加減な感じで案内等も差し上げておりましたが、時に「俺には案内がないのか」「うちやこし案内されてないんよ」、とひがまれる方も出現し、この機会に、小山メイリングアドレス管理部長とタッチ集客部長が共同で名簿作成をしつつあります（まだ未着手ですが、この案内状を差し上げる頃にはスタートする予定です）。

この機会に、神田会などに入会しようという殊勝な方を当日の会で紹介しつつ、第1回入会歓迎式を挙行しようとするものであります。今回は、新入会員として、西さん、松本さん、加藤さん、大西さんの入会式が予定されております。

また、連歌（れんが）は、江戸時代に芭蕉等によって隆盛していたものですが、現在ブームの予兆がしており、近いうちに教養豊かな日本人の備えるべき常識の一つになりそうであります。

ご承知のとおり、「俳句」なる言葉は、連歌の最初の5・7・5の句（発句ーほく）から来ており、芭蕉の俳句の多くは、各地で興行された連歌の発句であります。また、「あげくの果て」という言葉は、連歌の最後の句（揚句）から来ております。また「花をもたせる」という言葉も、連歌では「花の定座（じょうざ）」という特定場所で花（桜）を歌うきまりがあり、その花を読むところを譲ったりすることを「花を持たせる」といったことから始まった言葉です。

神田会の会員でありますので、このような常識は当然身につけているでしょうが、実際にやったことがないとか、この文化的な香りや楽しみを味わったことがないと言うのでは、高高としては、いかにもマズイということで急遽会員の教養の増進のための連歌の興行をも行うことにしました。

今回は、基礎的な連歌のやり方の紹介（5分程度）の後、練習会を、上記の会合の合間を見ながら実施します。なお、連歌は、通常は「膝送り」か「出勝ち」という方式がとられますが、今回は初心者対応ということで、「宗匠膝送り方式」という「神田会方式」とでも言うべき新しい方式で、俳句も和歌もやったことがない方でも、恥をかかずに呑みながら楽しめる方式でやる予定です。

なお、事前に勉強をしておこうという方は「高城修三（たきしゅうぞう）の連歌会」を検索すれば、連歌が学べます（なお、高城さんは、京都在住の高高40年卒の芥川賞作家です。参考までに、この案内文の末尾に、高城さんの連歌の基本の説明のところを抜粋して添付しておきます）。

今回の会場は、昨年も神田会を実施しました、月島でも評判のもんじゃの名店「能登」の2階の座敷を借り切り、30名～50名と大人数が集まっても大丈夫な場所を確保しております。

評判のもんじゃ店で、いつものように、わいわいと讃岐弁でしゃべり・呑み・食いし、大笑いしながら、新入会員を歓迎し、文化を身につけながら、来る東慶寺コンサートの打合せをしましょう。
皆様の参加をお待ちしております。

なお、いつものとおり神田会、好奇心旺盛な（精力は旺盛でなくても良い）で、讃岐弁がしゃべれる高高卒の者及びその友人、家族も参加を歓迎します。

神田会に入会しとらんという方も、いまから入会しようとする人も、入会はせんけど参加するどという方も、皆さんお誘いあわせの上、ご参加下さい。

何せ来週の月曜日で「余りにも急過ぎるやないかいな、参加表明する間もないがあ」・・・という方は、当日飛び入りでご参加下さい。歓迎します。

**ほいたら 来週の月曜日に
月島で お会いしましょう**

第37回高高神田会

月島もんじゃ・コンサート打合せ連歌入会歓迎会実行委員会幹事一同

.....出欠の返信用紙（09.10.4 第37回神田会）.....

fax 送信 03-5296-7678 岡崎宛

email 各幹事メール宛

参加

参加者とその人数

欠席

卒業年度

氏名

連歌の楽しみ方（「高城修三の連歌会」より抜粋）

連歌の本質は「変化」にあります。芭蕉はそれを「新しみ」とか「一歩も後に帰る心なし」と表現したのです。同じような発想・イメージ・言葉の繰り返しを「輪廻」と言い、これを避けなければなりません。

また、連歌の付けは即興を原則とします。こうしたことさえわきまえておけば、ルールにこだわる必要はありません。

ただし、連歌一巻を巻くにあって、その変化を保証し、乱脈に陥るのを避けるために、この連歌会では以下のような最小限のルール（式目五定）を定めています。三十六句詠み継ぐ歌仙連歌を定式にしていますが、時に応じて十八句の半歌仙連歌や二十四句の花信風連歌も可能です。

「式目五定」

- 1 変化を旨とすべし。
- 2 発句は季語・切れ字を要す。
- 3 脇は「体言止」、第三は「て止」とす。
- 4 春・秋・恋の句は二句以上五句以内とす。
- 5 月・花の定座を置く。

1が連歌の生命です。その変化を保証するために式目があります。

2、発句はその場に付ける挨拶の句ですので、当季となります。この発句を独立させたものが近代の俳句です。

3の脇は発句に応える句で、発句と同季になります。第三は大きく詩境を転じる句で、「～て」などで止めるのが一般的です。以上の三句はできるだけ形式を踏んで詠み、その後は変転果てしない世界に遊んでください。

4の春・秋・恋は二句以上、できれば三句ほど続けてください。

5の定座では「月」「花」という言葉を詠み込まなければなりません。

付句をする方法には、「出勝ち」と「膝送り」の二つがあります。連衆が数人を超えるような場合は出勝ち、それ以下の場合は膝送りが適しています。最初の一巡だけ膝送りにして、後は出勝ちにするという方法もあります。

要するに、最初に詠まれる発句（長句＝五七五）から最後の挙句（短句＝七七）に至るまで、短句・長句を交互に付けて、転変していく連歌の世界を楽しめばよいのです。その場合、付句が打越（前句の前句）と同じ発想やイメージでは堂々巡りになってしまいます。打越から転じながら、前句に付けていかなければなりません。ここに連歌の面白さがあり、また難しさもあります。

付句する場合、前句に付き過ぎると変化の妙が損なわれて面白くありません。かと言って前句から離れ過ぎると、訳が分からなくなってしまいます。連歌の句は、長句にしても十七字、短句なら十四文字ですから、多様な解釈が可能です。すでに詠まれた前句をどう新しく解釈し直すか、斬新な発想、思いがけないイメージの創出が問われるのです。